

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2022年(令和4年)9月16日 金曜日

無料

第124号

毎月発行

発行 2022年(令和4年)9月16日 金曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、68歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の大崎上映会は延期。新型コロナウイルス禍を乗り越えて4作目制作に向けて闘文化研究。埋もれた歴史を発掘することを標榜。



「東北のみなさん、おめでとうございます！」 仙台育英が甲子園で東北念願の初優勝 ようやく…やっと…優勝旗が白河関を越えた

「ようやく…やっと…」
全国高校野球の優勝旗が白河関を越えた



念願の優勝旗授与

今年夏の全国高校野球大会の決勝が先月の八月二十二日に行われ、宮城の仙台育英高校が山口の下関国際高校に八対一で勝って見事に初優勝を勝ち取った。周知のように、東北勢の優勝は春夏通じて初めてであり、長年の悲願だった。

しかし最初から優勝候補と大きく騒がれていたわけではない。特に注目されるということもなく、いつの間にか、すると決勝に進出して、見事に優勝したといった感じであった。また、決勝戦でのチームホームランがその大会の唯一のホームランで、それを迎えるまでは、「甲子園で

一度もホームランを打たないチームが優勝するのではないか」とも陰でささやかれていたほどだ。それくらいに、打撃面のスター選手もいなかった。それに、ものすごく注目される剛速球ピッチャーがいたわけでもなかった。筆者も宮城県出身なので、当然ながらテレビにかじりついて応援してはいたが、正直に言えば、まさか優勝するとは思っていなかった。できる限り、前評判の高い強豪チームとの直接対決を避けて、何とかひと試合でも勝ち残って欲しいと願っていただけだった。

しかし、まことにうれしいことに、筆者の思惑を見事に裏切って優勝した。全国高校野球の優勝旗が白河関を越えることは、東北関係者ならば、秘かな、長年の共通の願いだっただけ、それをあつけないで成し遂げたことは、ほんとによくやったと心からほめたうえであげたいし、地元での優勝パレードくらい認めてやれ

ばいと思う。一世紀もの長い期間の挑戦だった。それにしても長かった。下の画像にもあるように、旧制中学時代を含めて、甲子園での高校野球大会において、決勝で勝てない期間は、実に百年以上なのだ。今大会前までに決勝戦にコマを進めたのが十二回。したがって、実に十二連敗だったのだ。

もう、一世紀以上に亘る「呪縛」といっていいレベルの話である。その負け続けた決勝のなかでも、特に筆者の記憶に残るのは、一九六九年の青森・三沢高校の決勝戦。当時の三沢高校のエースの大田幸次選手は、延長を含めて十八回を投げ抜いた。そして引き分け。いまでは

考えられない苛酷なピッチングであった。そこまで戦ったのだから両校優勝で良いではないかとの声もあったが、再試合となって、翌日にも投げた絶対エースだから仕方ない。その球数合計、実に二百六十一球。そして力尽きて敗れた。まことに可哀そうだった。

今はアメリカで活躍中のダルビッシュをエースとする宮城・東北高校も決勝で敗れた。同じく、アメリカで活躍する、岩手・花巻東出身の菊池雄星投手も決勝で敗れた。

日本のプロ野球で活躍する秋田・金足農の吉田輝星選手も決勝戦で敗れた。決勝戦で破れた東北チームはもちろん、これだけではないが、筆者の記憶にこ

今大会前までに決勝戦にコマを進めたのが十二回。したがって、実に十二連敗だったのだ。

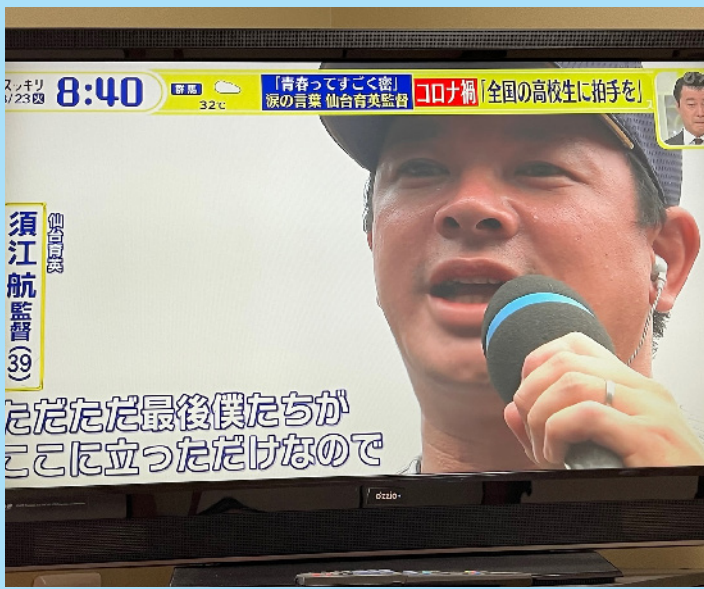
同じく、アメリカで活躍する、岩手・花巻東出身の菊池雄星投手も決勝で敗れた。

年	対戦相手	スコア	結果
15年	秋田中	1-2	○
69年	三沢(青森)	2-4	○
71年	磐城(福島)	0-1	○
89年	仙台育英	0-2	○
11年	仙台育英	6-7	○
13年	東北(宮城)	2-4	○
19年	花巻東(岩手)	0-1	○
2011年	光星学院(青森)	0-11	○
2012年	光星学院	3-7	○
2012年	光星学院	0-3	○
2015年	仙台育英	6-10	○
2018年	金足農(秋田)	2-13	○
2022年	仙台育英	8-1	●

100年以上の“決勝のカベ”…日テレ



決勝戦で涙をのんだ主な選手たち…日テレ等より



須江監督・日テレ

ただただ最後僕たちがここに立っただけなので

びりついているのは、これらの試合である。そして、どうして決勝で勝てないのだろうかと何度も何度も思った。
東北勢が強くなったのは温暖化のおかげ?
確かに、最近の東北の高校野球チームは、以前と比べて強くなった。かつての東北チームは、冬の期間は積雪で屋外での練習が出来ずに、練習量不足で弱いと言われた。近年の温暖化により、冬でも練習が出来るようになったから強くなったとの奇妙な分析もある。また、今の野球有名校の高校選手は、地元出身選手の割合は極端に減少している。全国から、優秀な中学生をスカウトしてきた結果、東北の有名私立高校が強くなったということもある。

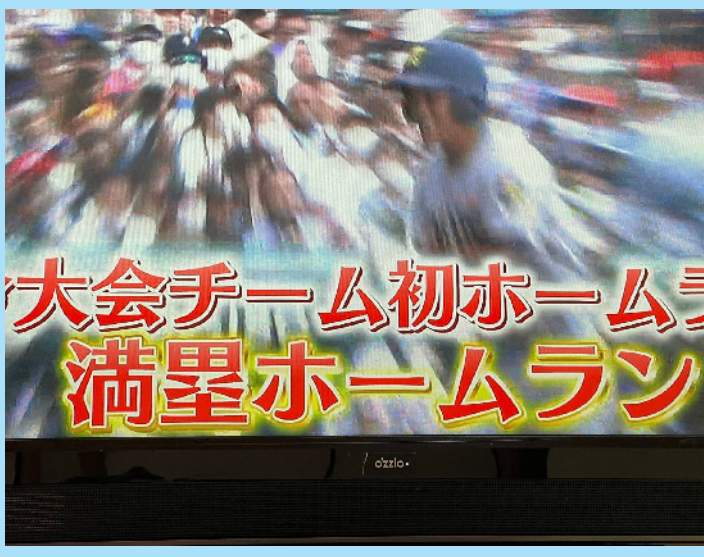
これで全国的に、平等な条件に近づいてきたとも言えるので、優勝は誇りに思っている。実力である。唯一残るハンディキャップは、甲子園に近いかどうかのみとなる。筆者などは、暑すぎる夏の甲子園を避けて、北海道や東北で開催すべきと思うが、西日本勢はきつと反対するであろう。
「地元愛」を隠さず表明できる希少なイベント
甲子園の高校野球大会というのは、視聴者の「地元愛」を、おおびらに恥ずかしげもなく表明できるイベントである。「おらが都道府県思い」を思いきり表出して、手に汗握り、応援するのである。いまは故郷を捨てた人もかつての幼少時代を過ごした場所を思い出し、選手たち

でも、それをさせてくれたのは僕たちだけじゃなくて、やっぱり全国の高校生のみんなが本当によくやってくれて、(例えば)今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとかそういう目標となるチームがあったからどんな時でも諦めないで暗い中でも走っていったので本当に全ての高校生の努力のたまものが、ただただ最後、僕たちがここに立っただけなので、是非全国の高校生に拍手してもらえたらと思います。

須江監督の謙虚な言葉・日テレ

にその思いを託し、あるいは、地元に住む人も地元愛をフルに出し切って応援できる機会である。現代の日本では、なかなかこうした機会は少ない。そうした観点をさらに掘り下げていくと、遠くは、江戸時代までの幕藩体制から明治の都道府県制度に切り替わったことを想起させたり、あるいは、戦後の集団就職等により全国から大量に大都市圏に集められた労働者たちの望郷の念などが見えてくるのは筆者だけではない。こうした場合、高校野球は単なる高校生のスポーツイベントではないと筆者は考えている。

ことは、筆者にとつては、明治維新の直前の奥羽越列藩同盟の敗戦がダブって見える機会ではない。今夏の甲子園優勝が、奥羽越列藩同盟の敗戦とその後の中政府によるいじめへの恨みを一部でも晴らしてくれたとも思えるのだ。いや、そう思いたい。それだからこそ、たかが高校野球というなにか。奇しくも、決勝の相手はかつての長州藩圏にある下関の高校ではないか。大人げないとお叱りを受けるかもしれないが、時代錯誤と笑われようが、快哉を叫びたいところである。
「東北のみなさん、おめでとございます！」
それにしても、優勝時の仙台育英高校野球部の須江監督の優勝時のインタビューの最初の言葉が印象的だ。



初ホームラン・NHK

「宮城のみなさん、東北のみなさん、おめでとございます」。さらに「百年開かなかつた扉が開いた。多くの人の顔が浮かびました」と感謝の思いを語ったのだ。なんとこの言葉だろう。これまでの優勝インタビューでは聞いたことのないような言葉である。このひとことで、東北人の心を、ものの見事に、ひとつにしてしまったのだ。東北人が日頃抱いている中央からの差別感覚、それはいつも意識しているわけではないが、心の奥底にしまい込んでいる感情であり、そこから形成される東北への鬱屈した思いなどが、このたつたひとことですっきりと晴れていったのである。チームを優勝に導いたことが素晴らしいことは言うまでもないが、それ以上に、高校時代から有力な選手

この監督の、東北人の鬱屈した感情への鮮やかな切り込みは拍手を送りたい。興味深い監督の経歴
こうした言葉を発することが出来る監督の、母校である仙台育英高校の野球部在籍時代は非常に興味深い。二年生の秋から学生コーチとなり、裏方に徹してきた。公式戦への出場どころか、練習すらほとんどしたことになかったという。平成十三年、三年生春の選抜大会では記録員として準優勝を経験したが「決勝前日の取材でみんな緊張して、当日は試合前半の記憶がない」と振り返る。そして、その年の夏は一回戦で敗退。「悔しい終わりを方をして、指導者になれたらと思っただけが始まり」というのだ。

④ 測定会から出た数値を

として活躍した他校の監督とはまったく異なる。そしてチーム運営で重視したのは、生徒とのコミュニケーションである。グラウンドに立てなかった自身の思いを踏まえ、一人一人の個性を分析して試合に出るために必要なものを個人面談で伝えたという。そうした思いが実を結んだ。
ユニークなチーム運営
具体的なチーム運営は以下の通りでも興味深い。

① 4年前の監督就任後、最初に取り組んだのが、メンバー選考のための基準を詳細な数値で示すシステムの構築
② 選手たちは野球の基礎能力を測る測定会に臨む。年4回行われ、計測する項目は18個。野手の場合、バットのスイングスピードや飛距離、ホームから一塁まで駆け抜ける走塁のスピードなど。投手の場合、球速や「ストライク率」と呼ばれるコントロールのよさを判断するデータを測る。
③ 合格の目安の基準設定。スイングのスピードは最低ラインが140キロ、合格ラインが150キロ。投手はストライク率が最低55%以上、できれば65%前後。ストライク率が上がれば自滅失点することが少なくなる。スピードを満たしてもストライク率が55%ないとトーナメント登板は難しい

⑤ 選手の力を数値化する最大のねらいは、それぞれの強みや弱点を、監督だけではなく選手にとって「見える化」すること。測定したデータは、過去の選手のものも含めすべての部員に共有される。選手たちは長所や短所が客観的な数字で示されることで、自分の目標や課題をより明確にすることが出来る
⑥ 監督はこれらのデータをチーム編成にも活用。バッターを例に見ると、選手のタイプを5つに区分。Aは出塁率が高い選手、Eは長打力に秀でた選手。Cは、どちらもまんべんなくできるバランス型。野球は、Eタイプが9人並んでいても得点になりづらかったり、Aタイプだけでは三塁まで進めるけどホームに帰ってこれなかったりする。チームとしてどのタイプの選手が何人必要で、どういう打順の組み方をするのか、丁寧に説明しながら、選手にはレギュラーを目指してどのタイプで自分がエントリーするのかを決めてもらう形で進める。その5つのタイプの中で選手たちが競争していく

高校野球のあり方に一石を投じる
こうしたチーム運営方針

基に毎年百人近くが在籍する選手をチーム分けして紅白戦実施。紅白戦では実践で発揮されるパフォーマンスデータをチェックする
⑤ 選手の力を数値化する最大のねらいは、それぞれの強みや弱点を、監督だけではなく選手にとって「見える化」すること。測定したデータは、過去の選手のものも含めすべての部員に共有される。選手たちは長所や短所が客観的な数字で示されることで、自分の目標や課題をより明確にすることが出来る
⑥ 監督はこれらのデータをチーム編成にも活用。バッターを例に見ると、選手のタイプを5つに区分。Aは出塁率が高い選手、Eは長打力に秀でた選手。Cは、どちらもまんべんなくできるバランス型。野球は、Eタイプが9人並んでいても得点になりづらかったり、Aタイプだけでは三塁まで進めるけどホームに帰ってこれなかったりする。チームとしてどのタイプの選手が何人必要で、どういう打順の組み方をするのか、丁寧に説明しながら、選手にはレギュラーを目指してどのタイプで自分がエントリーするのかを決めてもらう形で進める。その5つのタイプの中で選手たちが競争していく

前号の提案が現実化！海外からの工場の「国内回帰組企業」が出現！ 仙台に本社があるアイリスオーヤマ、中国から工場を国内回帰実施！ シリーズ【東北再興のための新産業創出】第6回



仙台にあるアイリスオーヤマ本社

当新聞の第二百二十四号発行を明日に控えた本日、驚きのニュースが飛び込んできた。

そのため、急遽記事を入れ替え、このニュースを詳しく紹介することとした。それだけ衝撃的なニュースと判断した。

そのニュースとは、宮城県仙台市に本拠を置く生活用品大手のアイリスオーヤマが、中国から工場を国内回帰させること、その回帰が可能となったというニュースである。

このニュース発表をきっかけに、経済界はもろろん上げられ、大きな話題を呼んでいる。

実は、当新聞の前号(八月十六日発行)で、【東北再興のための新産業創出】シリーズ第5回で『海外からの「国内回帰組企業」を東北

6県に誘致するプロジェクトを仕掛けるのはどうか?』と1-2面を使って提案したばかりだった。

わずかに月後に、この提案が現実のものとなるのは、提案した張本人の筆者も、当新聞も驚くばかりである。

ただ、残念なのは、国内回帰する工場の受け入れ県が東北ではないことである。とはいえ、東北の宮城に本拠を構える大企業が、中国からの工場国内回帰第一号となり、大きな話題となっていることは大いに喜ぶべきことである。

このニュースに関して詳細な分析は時間がないため、後ほど記事にすることとして、以下、あちこちで報道されるニュースを、ほぼ原文のまま紹介する。抜粋箇所等の選択は当新聞の責任であることをお断りする。

【朝日新聞デジタル】

—2022.9.15 配信

生活用品大手のアイリスオーヤマ(仙台市)は、急激な円安の進行や燃料価格の高騰の影響で上昇している生産コストの軽減のため、中国工場で行っている日本向け製品の一部の生産を、国内の工場へ移管した。

6月に方針を決めたもので、9月に入って金型を国内工場に運び、生産の準備を進めている。

同社によると、対象は、大連など中国国内の四つの工場が生産していたプラスチック製の衣ケースや園芸用品など計約50種類で、埼玉、滋賀、佐賀の三つの工場に生産を移す。国内に生産を切り替えることによって、輸送コストなどを減らし、約2割のコストを削減できる見込みという。

同社は、今後対象商品を拡大することを検討している。

—2022.9.15 配信

【Your News Online】

コスト削減を理由にアイリスオーヤマが国内回帰へ

NHKの報道によると、アイリスオーヤマがコスト削減のために中国で生産していた約50種類の製品を国内工場での生産に切り替えま

す。理由としては、コロナ禍やウクライナ侵攻などで発生した原材料費や燃料費の高騰や24年ぶりとなる急激な円安の影響があるとのこと。

これによって生産や輸送のコストが上昇していることから、衣ケースなどのプラスチック製収納用品約50種類の生産を日本国内の3つの工場に移管します。

これによって約2割のコスト削減が見込めるといふことで、今後は園芸や除雪用品の生産も国内回帰を検討しています。

同社は「輸入商材の原価が上がり、収益性の低下が避けられない」としており、中国で作るより日本で作った方が儲かる時代が到来したことが分かります。

この問題で重要なのは、アイリスオーヤマが海外での生産コストの高騰と円安を長期的なトレンドだと認識しているところだ。

コロナ禍やウクライナ侵攻が落ち着いたとしても、生産コストが落ちたり円が高騰したりしないと考えると、この今回の決定といえるでしょう。

中国の人件費を含めた物価高はコロナ以前から指摘されており、それを理由に東南アジアなどに工場を移す日本企業も少なくありませんでした。

そうした東南アジア諸国も物価上昇が著しいこともすでに多方面で指摘されているとおりです。

これは、輸送費を掛けても日本より安く生産できる候補国がもうないということの意味します。

日本が「30年賃金の上がらなかつた国」であることは誰もが知る事実ですが、その結果、海外で日本向け商品を生産するメリットすらないほどアジア諸国に追いつかれてしまったことになりました。

国内回帰で国内の雇用が増えるともみられる向きもありますが、労働人口不足で技能実習生に頼らなければならぬのが日本の現状です。

円安で日本で就業するうまいがどどん減っていく中、人身売買とも呼ばれる劣悪な労働環境が改善されなければ、せっかく回帰した国内の工場も満足に稼働させられなくなるおそれもあります。

【Smart FLASH】

—2022.9.15 配信

生活用品大手のアイリスオーヤマが、約50種類の製品の生産を中国・大連から国内の工場に移すことを決めた。9月14日、NHKが報じた。

報道によると、大連の工場では、主に日本向けプラスチック製品を生産しているが、原材料価格や輸送費の高騰でコストが上昇。円安の長期化もあり、衣ケースなどを国内3工場に移管するという。

埼玉県深谷市の工場には、すでに生産に必要な6種類の金型が到着。国内生産に切り替えることで、約2割のコスト削減が見込めるため、さらに園芸・除雪用品などの移管も検討しているという。

スポーツコメンテーターの末大氏は、9月15日、この記事を引用しつつ「中国よりも日本で作ったほうが安くなりました」と自身のTwitterに投稿。

タレントのモロリー・ロバートソン氏もやはり記事を引用して「こんな形で中国離れが起きるとは」と投稿するなど大きな話題となり、「アイリスオーヤマ」がトレンド入りする事態となった。

アイリスオーヤマは、約100億円を投資して岡山県瀬戸内市に工場を新設すると発表。2024年に着工する予定です。

(途中略)

アイリスオーヤマが中国から国内に生産を移すことで、約2割のコスト削減を見込めるということに、SNSでは議論が沸騰した。

《国内経済の回復にも貢献する素晴らしい決断だ!》

《この流れを拡げていって欲しい》

と歓迎する声がある一方で、日本の生産コストが下がっていることを危惧する声も多く上がった。

《いよいよ国内回帰が(止むに止まれず)始まったかな。現時点でも2割はなかなかインパクトある》

《150円/\$で日本の生産コストは中国を下回ると言われている。輸送コストを含めれば、日本はすでに中国よりも労賃が安い国になったということ》

《これは輸送費とかの関連が原因で、人件費だけを見ればまだまだ中国の方が安い。しかし比べられる時点で、日本が安くなったのは確かなんだろうね》

《中国より日本の人件費の方が安いからレノボやファジーウェイが日本に工場作る時が来るかもね》

9月14日、円相場は1ドル114.4円後半で推移。岸田文雄首相は経済財政諮問会議で、足元の円安メリットを生かした企業の国内回帰や供給力強化といった「日本の稼ぐ能力」を高める取り組みが重要と話しているが、はたして――。

以上、各社のニュースをほぼ原文のまま紹介したが、今後、中国に生産拠点を置く日本企業の動向が気になるし、それ以上に、国内回帰工場の受け皿が東北に来るかどうかはもっと気になるところではある。

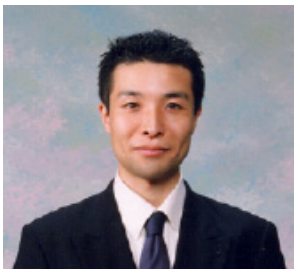
祝！ 一世紀越しの宿願成就！

東北勢として初優勝

今年の第一〇四回全国高校野球選手権大会、いわゆる「夏の甲子園」で、仙台育英高校が東北勢として初の優勝を成し遂げた。今年で一〇四回、すなわち一〇〇年以上にも亘る歴史の中でただの一度も優勝に手が届くことがなかった東北の高校が、この悲願を達成したのである。この間、夏の大会では九度、春の大会では三度、東北の高校が決勝に進出し、あと一步というところまで来たことが合計二回あったが、いずれも敗れて準優勝、すなわちここまで決勝戦の成績は二戦全敗であった。そもそも、一九一五年の第一回大会で、秋田中(現秋田高校)が決勝に進出したが、この時も延長一三回まで戦ってサヨナラ負けを喫している。そこから数えて、実に一〇七年後の快挙であった。

執筆者紹介

大友浩平
(おおもともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouchi.ootomo/>

二〇〇四年に始めた私の「東北ブログ」の最初の話題が「東北は六つで一つ」と題して、夏の高校野球を例に、東北六県の一体感を論じたものだった。この年は駒大苫小牧高校が北海道勢として初めて優勝した。この大会で一躍注目を集めた、東北の内と外の境界である「白河の関」は、実はこの時に既に越えていたと見ることもできるが、この時はそこで留まらず、さらに津軽海峡も越えていった。このときのブログで私は、「東北の人は、自分の県以外の他の東北の県の高校も応援する」と書いた。そう、宮城県民は地元の高校以外にも青森、岩手、秋田、山形、福島の高校も応援するのである。東北の他県の人に聞いても同じだったのだから、このこと自体当たり前のことと思っていたのだが、他地域から来た職場の上司がそのことに最初驚いたと聞いて、それが当たり前でないことを初めて知った。上司は中部地方にある県出身だったが、そちらでは他県の応援はしないし、同じ県内でも地域が違うとそれほど熱心には応援しないことであつた。そうした話は今回、他の人からも聞いた。どうも同じ地方の他県に對する感覚が東北とは違うようである。

東北として思ひは一つ

今回も「東北は一つ」というエピソードには事欠かなかった。決勝戦当日、当の白河の関のある白河市ではパブリックビューイングも行われた。

決勝戦の一つ前の準決勝は、よりによって東北勢同士の間でなつた。仙台育英高校と福島の聖光学院高校との対戦となつたのである。これは私ならずともどちを応援すればよいか悩んだ人も多かつたのではないだろうか。どうせなら決勝で当たってほしいかたといふ思いも多分皆共通だつたらう。ただ、よく考えれば、仮に準決勝で別々のチームと対戦したとすると、最悪の場合、仙台育英高校も聖光学院高校もどちらも敗れるというケースも有り得る。確実に決勝戦に駒を進めるといふ点ではこの対戦もやむを得なかつたと言えらる。そして、勝つた方は負けた方の思いもしっかり背負つて決勝戦に臨むというのである。実際、準決勝で敗れた聖光学院高校の

戦い方を変える采配

主将は、試合終了後、仙台育英高校の選手たちに涙ながらに「必ず優勝しろよ」と声をかけたという。そして託された思いも背負つての決勝戦であつたわけである。

そのように受け継いだ思ひは、選手だけのことではなかつた。仙台育英高校のブルースバンドは、聖光学院高校のブルースバンドが応援曲として演奏していた福島ゆかりのバンド「GREEN」の曲「キセキ」を、決勝戦の場で演奏したのである。準決勝の後、ブルースバンド部員の間から「同じ東北である聖光学院の思ひも引き継ぎたい」という声が上がつて急ぎよ演奏することを決めたのだそうである。

それにしても、今回の仙台育英高校の戦いぶりは見事であつた。これまでの高校野球は、チームの柱に「エースで四番」を典型例とする絶対的なエースの存在があつて、その選手を中心にチームがまとまつていることが多かった。今大会で言うと、滋賀の近江高校などがその典型例である。東北で言えば、四年前の二〇一八年夏の甲子園で決勝戦に進めた金足農業高校がそうであつた(ちなみにこの時の金足農業高校のエースは三番打者であつた。「エースで四番」はチームの精神的な要でもあり、頼りがいのある存在であるが、その存在がひとたび疲労や不調により本来のパフォーマンスを発揮できなくなるとチーム全体の士気に影響を及ぼし、そこからチーム力が低下しかねない。今回の仙台育英高校のチームは、突出した存在がいないわけではなかつた。ホームランを量産する四番がいるわけでもなく、絶対的なエースがいるわけでもない。その代わり、長打に頼らず単打をつなぎ、積極的な走塁もする好打者が揃い、誰をエースと呼んでもおかしくない投手が五人もいた。これらの投手が決勝戦を含む五試合を分担して投げ、一人に疲労が蓄積しないようになつていった。五人のうち一番多く投げた投手でその球数は二二三球で、以下多い順に一八八球、一二四球、一二二球、八八球である。これに對して、近江高校のエースは五試合を一人で六四四球も投げた。このような、プロ野球でも走つていけたので、本当に全ての高校生の努力のたまものが、ただただ最後僕たちがここに立つたというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたらなと思ひます」つて言葉もとてもよかつた。自己主張少なめで、謙虚で、周りの感謝を忘れない、東北人のいいところが凝縮されたようなフレーズであつた。ちなみに、須江監督は埼玉の出身だそうであるが、東北人である。出身はどこであれ、東北にいる人、逆

てきたことを実現させたことについて、開口一番「宮城の皆さん、東北の皆さん、おめでとうございませう！一〇〇年開かなかつた扉が開いたので、多くの人の顔が浮かびました」つて言つてくれたのが特に印象的だつた。まさに、このことが宮城だけのことではなく、東北全体の願ひであつたことを踏まえての第一声だつた。「多くの人の顔」は本当に多くの人が違ひない。

須江監督のインタビューで、「青春つて『密』というフレーズが特に共感を持つて受け止められたが、私はその後の「僕たちだけじゃなくて、やっぱり全国の高校生のみならず、本当に今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、そういう目標になるチームがあつたから、どんな時でも諦めないで、暗い中でも走つていけたので、本当に全ての高校生の努力のたまものが、ただただ最後僕たちがここに立つたというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたらなと思ひます」つて言葉もとてもよかつた。自己主張少なめで、謙虚で、周りの感謝を忘れない、東北人のいいところが凝縮されたようなフレーズであつた。ちなみに、須江監督は埼玉の出身だそうであるが、東北人である。出身はどこであれ、東北にいる人、逆

に他の地においても東北に思ひを寄せる人、皆東北人である。かつて、東北にいる人は「蝦夷(えみし)」と呼ばれたが、それは特定の民族を指してのものではなかつた。奥州藤原氏など、元を辿れば撰閑家の藤原氏に連なるにも関わらず、当の藤原氏からは「夷狄(いでき)」と「辺境の野蠻人」と蔑まれた。奥州藤原氏自身もそれを隠すことも否定することもなく自ら「東夷の遠酋」、「俘囚の上頭」と称した。

さて、私は一八年前のブログでこう書いた。「最近、地方分権の論議と共に道州制の導入が話題となつている(第二八次地方制度調査会)。道州制実現の暁には、他の地域ではどの県とどの県が一つになるか議論になるかもしれないが、恐らく東北では東北六県が一つとなつた「東北州」が誕生するに違ひない。それは、奥州藤原氏以来、八〇〇年を超える年月を隔てて再び東北が一つになることである。しかし、懸念もある。東北が一つとなつてしまつたら、夏の高校野球の出場枠は一つに減らされるか、枠は一つに減らされるか、よくても北東北と南東北の二つになつてしまつたら、確率的に東北の高校の優勝の可能性は減つてしまふ。東北の高校球児には、ぜひとも東北が一つになる前に優勝してほしいものである」と。

道州制が実現して東北が一つになつてしまつたら、甲子園への出場枠は、今の北海道と同じく、北と南の二つだけになつてしまふかもしれないので、その前に優勝してほしいと思ひたわけである。幸か不幸か、東北勢は優勝したが、前回も触れた通り、道州制は実現からはるかに遠ざかつていゝ。出場枠が二つになることなど、夢のまた夢の状況である。

甲子園で東北勢が優勝するのは一世紀以上の時が必要だったが、東北が一つになるのに一世紀は費やしてほしくないものである。元々、東北の高校の野球部は指導者間の交流が盛んで、監督同士も仲がいいのが特徴だそうである。それは地域に共通する思ひをお互いの交流や切磋琢磨で実現しようという思ひがあつたのだから。そしてまたその根底には、同じ地域、同じ東北という意識があつたのに違ひない。このような東北皆の思ひを引き継いで、決勝戦で見事に優勝を成し遂げたわけである。

もし、東北の各県がバラバラに優勝を目指していたとしたら、初優勝はさらにもう一世紀くらい遅かつたかもしれない。こうした、県を越えて志を同じくする仲間がいることの強み、それが東北が一つになることの意義である。

「東北人」らしい言葉

優勝が決まつた後の仙台育英高校の須江監督のインタビューもとてもよかつたと思ふ。この一世紀以上誰もなし得ず、次に託され



「東北のテーマ曲」を探してー 郷土を音に変える 楽師たちの事

音楽は南で生まれるが、文学は北で育つー以前、赤坂憲雄と熊谷達也そして山形のアート評論家・池上冬樹の対談録を読んだ際に印象に残った言葉である。確かに内面的なエネルギーを必要とする文学は東北の風土にふさわしいが、では本当に北では外に向けた表現力を要する音楽は生まれ育たないのだろうか？そんな疑問がこれまで拭えなかった事も、この言葉が心にこびり付いていた理由なのかも知れない。

先日、久々にテレビを観たら六〇〇八〇年代にかけてのアイドルランキングのような番組をやっている、



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

ーに影響すら与えているアーティストもまた存在している事を、あらためて認識するのだった。

本稿では、以前ケルト音楽関連の記事でも書いたように個人の趣味趣向に左右される音楽テーマではあるが、図らずも東北の看板的存在となった、そして敢えて東北の「音」であり続けようとする二人の異なる音楽家に想いを馳せる時間にお付き合い願いたい。

まずは、九〇年代に私のように東京へ出て行った東北人にとつて、まさに「東北の歌姫」的存在であった遊佐未森について語ろう。

その存在は様々な個性ある女性シンガーソングライターが割拠し始めた当時の音楽シーンにおいても極めて異質・独特であり、鮮烈なインパクトに満ちていた。

仙台出身(遊佐姓は宮城・福島に多い)にして東京の国立音楽大学を卒業した才媛であり、幼少から地元合唱団に所属するなど自ら鍛錬に励み究めた多彩な表情を持つ声質・音量を備えていた。上京前より作曲を志していたが、初期は彼女を見出した音楽プロデューサーが全面的にバックアップし、その容姿や声が醸し出す世界観を演出する。それは絵画のような緑豊かな風景イメージの中に展開する所謂メルヘンの世界であり、その中で歌う彼女の姿は、まさに森の妖精のよう

な出で立ちであった。登場当初から宮澤賢治の文学世界に影響を受けたと語っていただけに、そのイメージ形成には自然との親和性や東京的価値観への揺さぶりが緩やかながら徹底的にフィーチャーされ、遊佐の只の癒しに留まらない強さと柔軟さを感じさせる歌声によって、それまで誰も耳にした事のない異世界的音楽が確立していったのである。

遊佐自身が語るように、彼女が幼少より過ごした仙台は現在のような音楽祭などのイベントもメディアアートのような都市の看板的存在も無いが、未だ地方独自の文化が色濃く残る、大きくも素朴な田舎町であったという。「杜の都」とは、元来は江戸期に食糧確保のために武家屋敷が町中に植樹された事で生まれた緑の様子から呼ばれたものだが、遊佐未森は「杜の都から来た歌姫」として東京そして全国に宮澤賢治も夢見たであろう理想郷のイメージと、今や日本の他のどの都市も明確には持たない唯一の雅称としての「杜の都」をあらためて広めたのである。

只、遊佐未森に対する世間の反応には、好き嫌いが極端に分かれた。同様に云わば聴く者に癒しを与えるタイプのアーティストは少なからずいたが、彼女のようにならざるが、彼女の所謂「不思議系」な表情が嫌いだ、と名指しされるケ

ースは珍しかったかも知れない。それだけ、彼女の存在感が強烈だったという事だろう(実際、類似スタイルのアーティストで、彼女ほどコンサート会場を客で埋め尽くした者はいなかった)が、遊佐自身がそれまで演出され作られてきたイメージに限界を感じていたのか、徐々に自らの詩曲を手掛けるようになる。

何故当初から作曲を志しながら長く他による演出を許したか。それはおそらく、九州人や関西人のように強く主張できない、謙虚で奥ゆかしい東北女性故ではなかったろうか、と思う。

元々アイルランド音楽への強い傾倒も知られていた彼女はそれまでのメルヘン的イメージを脱却し、日本では他に見られない幻想的なシリアスな女性シンガーソングライターへと変貌を成し遂げるのであった。その後体調を崩して都会を離れ、神奈川県鎌倉市に在住と伝え聞か、近年仙台で時折遊佐未森の名を耳にするのは、彼女が二〇〇五年に、さとう宗幸や稲垣潤一ら宮城県ゆかりのアーティストとともに結成した「みやぎびつきの会」の活動の為だろう。

遊佐によれば、当初は「ふるさとに恩返しを」という純粋な郷土への感謝と愛情から始まった、年一回の県内の音楽イベント企画だったが、二〇一一年の震災を受けて現地の児童救済支

援を中心に活動する一般社団法人に転身、二〇一八年に現状の改善を認め、元の音楽企画へ復帰したとの事である。「びつき」とは宮城のみならず東北一円でカエルを意味する方言で、「恩が返る」「故郷に帰る」「元の姿に還る」という想いと、「郷土に新たなオタマジャクシを育てる」という意味も含まれている、という、遊佐未森の故郷への想いはそこまで強かったか、とあらためて驚かされたものである。

さて、遊佐未森のように東京で成功し郷土に錦を飾った形のアーティストとは全く違う、稀有なる東北の体現者たる存在もまた独りこの地に屹立している。その唯一無二の音楽家「姫神」についても綴ってみたい。

男性的な岩手山と対を成すようにその東方に女性的な流麗さをもつて聳える神祕の山の名を頂いた姫神は、まさしく岩手県で始動し、今も尚岩手県で活動を続ける音楽ユニットである。

昔からその名を知り、曲も聴いた事があるという人ならば、独特のシンセサイザー音に彩られた幻想的な音楽を思い起こすかも知れない。それは、かつてのテレビ番組の名編『シルクロード』のテーマ曲で知られる喜多郎の音楽にも似ているが、姫神の音楽は更に神秘的・宗教的な雰囲気を持

びていた。それもそのはずと言うべきか、その楽曲タイトルを見ると『奥の細道』『秀衡』など、仏都・平泉をテーマとしたものを始め、遠野や縄文時代を取材した徹底的に岩手、東北にこだわる曲作りなのである。

只、こちらもシンセサイザー音や曲調に好き嫌いが分かれるとよく言われ、私も実はかつてアルバムを通して聴きながら、その音のパターンに今ひとつ入っていきせず、それ以来敢えて手に取ってこなかった。

ところが、数年前にたまたまラジオで姫神の曲だという『千年の祈り』が流れたので聴いてみると、おやっと思つた。これが、あの姫神か？と耳を疑うような曲調と、音作りだったのだ。タイトルからやはり平泉を想起させるが、確かに梵鐘の音で曲が始まり、宗教的な雰囲気はありつつ、例の独特なシンセサイザー音ではなく、ブルガリアンヴォイスのような女性合唱が起こつて、変化に富んだシンフォニーに続いていく。

姫神は変わったのか？と思うと、驚いた。何と、姫神の創始者がかなり前に急逝され、現在はそのご子息が二代目姫神として活躍中だというのだ。不覚を恥じ、あらためてその軌跡を追う。初代姫神・星吉昭は宮城県若柳町出身で、もとは黒人音楽に憧れ東京でジャズを学んでいたが、洋楽をひたすらコピー

していく毎日に疑問を感じ、盛岡に音楽教師の職を得たのを機に一時的のつもりで岩手へ渡つた。ところが、ここで地元の民謡や神楽に触れ、「これはブルー



『姫神』2013年のアルバム。ロシア歌手オリガと共演した「天空への旅」は素晴らしい。

スだ」と感心してしまう。黒人霊歌(ニグロ・スピリチュアル)に対して、「北人霊歌」ともじつたという新たな東北音楽の創造は、民俗音楽から何かを生み出すという発想がほとんど見られなかった当時、大変勇気のいる事であったという。しかし時代は三内丸山遺跡の発掘により縄文時代が見直される価値観転換の節目を迎え、世界の環境問題に対しても東北的思想と風土の持つポテンシャルを感じた星は勢いに乗る。縄文時代に話されていたと推測される言語を用いた歌の他、ブルガリアンヴォイスにヒントを得た女声合唱のアイデアも初代の想起で、しかしながらこの新境地の開拓には時間がかかる、と語りまだまだこれからと未来を見据えていた矢先急逝となつてしまったようだ。

二代目姫神となったその長男・星吉紀は初代生前から姫神演奏に参加していた

というが、ユニット名もそのまま引き継ぐとは、これもなかなか勇気のある事だつたに違いない。先代とは違うものになる可能性を自覚しながら、先代の思想に共感し、東北における姫神という存在の普遍性を見出していたという事であろう。

彼の生み出す新たな姫神の音楽には、先代にはなかったアジア・アフリカ広域に渡る音楽融合の模索が感じられ、ディープロレストなどケルト圏の現代音楽化の流れにも通じる壮大な世界観が垣間見られるが、決して真似や亜流ではなく、確かにこれは日本の、そしてどこよりも東北の新たな音楽だと確信できる響きを感じられるのである。

北に音楽が生まれ育たない、というのは本当か。おそらく、古代より確かにこの地に育まれながら、近代からの長い間、西国や海外の勢いに押さえ込まれてきたその力が、ようやく新たな世代によって息を吹き返すーその時代はまだ、始まったばかりなのではないか。そんな風に思うのである。



トロゲ



魚のしっぽ



権現舞

今年に入ってからからの異変や
 激変はいつたどこまで続く
 のだろうか。終わることはな
 いのだろうか。

天候は激変するし、季節変
 動もおかしい、記録的な暑す
 ぎる夏もあり、集中豪雨も異
 常なレベルで、地震も頻発し
 ているし、火山も噴火して、
 これでもかというほど、自然
 環境に異変・激変が発生して
 いる。

これらだけでも大分弱って
 きた心持ちのところ、今度
 は政治の乱れが立て続けに起
 きていて、まだ終息の気配も
 ない。

もうこれ以上の異変はいら
 ない。だれか、もう落ち着か
 せて欲しいと願いたくなる。
 そして、どこかに旅に出たい
 とも思う。

シリーズ 遠野の自然

「遠野の白露」

遠野 1000 景より



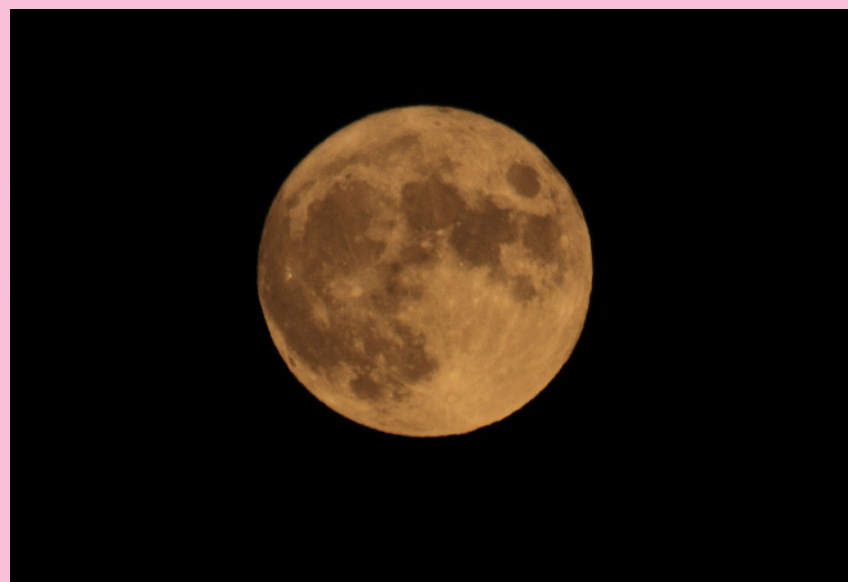
ミズアオイ



ホトトギス



サワギキョウ



中秋の名月



粘菌

これからの【三陸酒海鮮会】の運営方針を変更いたします！

コロナ禍による度重なる延期に加えて、ロシアのウクライナ侵攻による諸物価高騰で、これからの会の運営方針を見直さざるを得なくなりました

【基本方針】

① 会は基本的に継続いたします。ただし、これまで長年、低価格でご協力いただいた「渋谷・焚火家さん」での開催はむずかしくなりましたので、毎回場所を変えての少人数開催といたします。開催頻度は以前と同程度といたします。

② また、これまでは三陸海鮮と東北地酒中心の非常に高品質のメニューをお店から低価格でご提供していただいたおかげで、非常に安い参加料金となっておりますが、**今後は、当面の間、毎回、「割り勘」を基本とした料金**でお願いいたします。

上記のように、会の運営方法は変更させていただきますが、当会の開始時の方針であります、東日本大震災被災地への「間接支援」を継続的に行うとの当会の趣旨をご理解いただき、かつ、みなさまのご協力で約10年間で築いてきました「ご縁」を大事にしていきたいと思いますので、引き続き、多数のご参加をお願いしたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【足かけ10年に亘るこの会ですが、ここであらためて当会の歴史や、開催の趣旨等を振り返ってみます】

① 《 **歴史** 》 きっかけは東京タワーで行われた「カキ向き選手権」の当新聞取材でした。三陸被災地の牡蠣養殖者たちも参加していました。そこで剥いたカキを、渋谷・焚火家で食するというお店にもおじゃまし、当時のオーナーさんにこの会の開催をお願いしたところ、快諾していただき、当会がスタートいたしました。第一回は2013年4月27日。そこから現在まで、足かけ10年。1-2か月に一度の割合で開催し、実に44回を数えます。

② 《 **開催趣旨** 》 企画者兼主催者は電子タブロイド新聞の【東北復興】（現在は【東北再興】）。周知のように、2011年3月11日に発生した東日本大震災により、特に三陸被災地は大きな被害を受けました。その後、水産業インフラは比較的早く復興しましたが、消費は落ち込んだままでした。その点で被災地の復興は遅れたままでした。そこで、10年、20年という長期スパンでの三陸被災地復興を考える必要があると考えました。そうした状況を踏まえ、支援する側もそれに呼応し、従来の援助的な支援とは異なった、日常生活にしっかりと立脚し、肩肘張らずに比較的容易に出来る、非常に息の長い支援の形が求められていると考えました—『東京に居ながらにしての間接的支援』です。具体的には、被災地で生産も消費も同時に復興させるということではなく、まず生産復興は被災地で、消費は都市部でと、役割を分割した復興支援が必要だと考え、当会の企画にたどり着きました。上記を踏まえて、当初の企画名【おいしい復興支援】と称し、被災地・三陸の海産物を素材とした各種料理を、同じく三陸の日本酒とともにいただく復興支援という形に至りました。初回は、被災した三陸の水産加工会社関係者を招き、同じく被災した複数の東北酒造メーカーの「東北地酒」と三陸海鮮とのコラボ企画として開催しました。



写真でお伝えする
東北の風景
【東北の鹿たち】

写真撮影 尾崎匠

